

池田文書の研究(51)

著名人の書簡(経歴判明の人を含む)(その1)

池田文書研究会

[1] 青木周蔵の書簡

青木周蔵は明治期の外交官。青木周蔵の書簡は日本医史学雑誌第56巻第1号に9通掲載に付省略。

[2] 秋月新太郎の書簡

秋月新太郎は明治期の教育者。天保12年豊後日出藩士家に生まれる。内務省図書局長・女子高等師範学校校長歴任。大正2年没。享年73。(1841-1913)

1 明治17年1月31日 (77)
(封筒表) 駿河台北甲賀町九番地

池田一等侍医殿

(封筒裏) 〆 秋月新太郎

(スタンプ丸印 東京・秋月・

牛込神楽町一丁目二番地)

益御安静奉賀候、然は突然申上候て恐入候得共左之願意御採用被下候ハ、大幸之至奉存候

牛込神楽町二丁目廿番地 広瀬範治⁽¹⁾

右昨冬より大患ニ罹り原桂仙氏主任トナリ橋本⁽²⁾も度々来診、ベルツ氏も兩三度参候、然ル処近来余程悪症ヲ現シ心配仕候、尤橋本も近日より洋行ニ付多事有之打懸被只候事も出来不申、就ては甚申上兼候得共先生ノ御一診相願度義、原并ニ親属一同より申出候義ニ有之候、右之趣御許容被下候ハ、可相成ハ今夕ニも御来駕可被成下候、為夫同人忝差出候間宜敷奉願上候、早々頓首

一月卅一日

新太郎

池田国手 侍史

(1) 広瀬範治 広瀬青邨。幕末・明治期の儒者。文政2年豊前国に生まれる。広瀬淡窓の養子。

牛込神楽坂にて東宜園を開く。明治17年2月3日没。享年66。(1819-1884)

(2) 橋本綱常 明治期の医学者・陸軍軍医総監。明治17年陸軍卿大山巖に随行して欧州へ出張する。

[3] 秋元興朝^{おきとも}家扶の書簡

秋元興朝は上野館林藩主。秋元興朝家扶の書簡は日本医史学雑誌第55巻第3号に1通掲載に付省略。

[4] 秋山恒太郎の書簡

秋山恒太郎は明治期の官僚。天保元年越後長岡藩に生まれる。文部省出版課長・長崎師範学校校長歴任。没年不明。

1 明治 年6月8日 (80)

拜呈、過日来種々御厄介奉恐謝候、小生弥明日出立候ニ付昨日一寸御礼参上仕候処、御不在ニ付不得拜晤遺憾至極奉存候

一、次ニ過日一寸相願候小生ニ男骨炎症外国外科医ニ御一診之義何日頃何時ニ罷出候ハ、宜敷候や、乍憚御序ニ留守宅迄御一封御示諭被成置度、左候得ハ拙荆直チニ召連大学へ罷出先生へ御訪問仕り、御指揮を受ケ候様可為仕候ニ付何卒可然御配慮之程奉懇願候、右ハ御礼旁右相願度、取込不文言御海恕是祈候、謹言

六月八日

秋山恒太郎

池田謙斎様 侍史

[5] 浅野守夫の書簡

浅野守夫は廣島藩家老。浅野守夫の書簡は日本医史学雑誌第58巻第1号に1通掲載に付省略。

[6] 味岡良政の書簡

味岡良政は池田謙齋ドイツ留学中池田家の相談役と思われる。尚本書簡は勘返状である。

1 明治9年5月20日 (3453)

第四百七十号 (ゴム印)

私義明治三年十一月普国留学被仰付渡航候節は通称実名併称ニ付、彼地在学中両様ニも相用居候処、明治五年五月一人両名不相成御達ニ付、急場之義故留守心得之者往復之暇無之ニ付、以存意実名ニ相定候得共、本月十一日帰朝以来甚以不都合有之、外国旅行證并ドクトル免證其他於普国致著述候書籍とも都て謙齋ト相記有之候間、尔後実名秀之ヲ相廢シ、通称謙齋ヲ相用候様仕度、此段奉願候也

第五大区小三区御徒町壹丁目五拾貳番地

士族 正七位 池田秀之 印

明治九年五月廿日

東京府権知事 楠本正隆殿

私義池田秀之留学留守中心得居候処、去明治三年壹人両名不相成御達しニ付、当人へ往復仕度所存ニ候へとも、何分外国之事故日数相懸急場之義故、拙存知にて実名ニ相定候処、今般帰朝仕当人甚以不都合之由ニ付、無義前通称謙齋相用候様仕度義ニ付、拙者取究候義何共奉恐入候へとも当人申通通称へ御引替被下置候様仕度段添て奉願候也

池田秀之留守心得 味岡良政 印

明治九年五月廿日

東京府権知事 楠本正隆殿

願之趣聞届候事

明治九年六月九日 東京府権知事 楠本正隆

公印捺印

(上部に割り印あり)

[7] 足立正聲の書簡

足立正聲は東宮亮・諸陵頭を勤める。足立正聲の書簡は日本医史学雑誌第56巻第1号に1通掲載に付省略。

[8] 天方道の書簡

天方道は敦賀県士族。西南戦争に功あり。陸軍歩兵大尉。明治26年没。

1 明治 年8月11日 (68)

口上扣

熊之皮老枚龜末之品ニは御坐候得共、北海道ヨリ取寄候ニ付呈上仕候間御笑納被成下度候、以上

八月十一日

天方

池田様 執事御中

2 明治 年7月11日 (69)

鬱々敷気色ニ御座候処益御壮栄被為入奉恐賀候、然は此之品如何敷候得共御礼之驗迄ニ致呈上候、御笑納被成下候へハ本懐之至ニ奉存候、余ハ拜鳳と早々頓首

七月十一日

天方道

池田様 侍史

[9] 有賀長雄の書簡

有賀長雄は明治・大正期の公法学者。万延元年大坂の国学者家に生まれる。明治15年東大文学部哲学科卒業。陸軍大学・海軍大学・早稲田大学で国際法講義。大正2年袁世凱の法律顧問を務める。大正10年没。享年62歳。(1860-1921)

本書簡に関連してフェノロサの書簡を併載した。

1 明治16年5月22日 (1105)

拜啓、先刻御見舞被下候様奉願上置候患者の番地ハ飯田町四丁目十六番地住吉広賢⁽¹⁾、右願主ハ本郷加賀邸内文部省教師館一番住 文学部教授フェノロサ⁽²⁾、右之通ニ御坐候、且御診察料等ハ一切願主より差出し候都合ニ有之候、恐惶頓首

廿七日

北甲賀丁十七番地 有賀長雄

池田先生 執事御中

(1) 住吉広賢^{すみよしひろかた} 幕末・明治期の画家。天保6年遠藤家に生まれる。幕府御用絵師住吉家8代目住吉弘貫の養子となり、狩野友信等と共にフェノロサの日本美術収集に協力した。明治16年5月30日没。享年49。(1835-1883)

(2) フェノロサ アメリカの東洋美術史学者であり我国の美術史研究創始者。1853年（嘉永6年）生まれ。明治11年モースの紹介で来日。東大で政治・哲学・理財学を講義。23年帰国。1908年（41年）没。享年56。（1853-1908）

2 明治16年6月5日 (3372)

先日來住吉氏の儀ニ付種々御配慮被下候段実以て感謝ニ不堪候也、陳は本人ニも御高察に不違死去候ニ付遺憾之至にハ候へとも又已難き次第と奉存候、付てハ御診察料万端御定則も御坐候へく奉存候へとも不案内ニ候間、乍恐御教示之程御執事様へ御示命被下度、何れ拜顔之上疾と御礼可申述、先は要用まで早々頓首

五日 フェノロサ
池田先生 侍史

（本書簡は和文で筆跡から有賀長雄の筆と思われる）

[10] 有栖川宮家家令・家扶・藤井希璞の書簡

有栖川宮は皇族。有栖川宮家家令（島津定）・家扶・藤井希璞の書簡は日本医史学雑誌第54巻第1号に21通掲載に付省略。

[11] 有地品之允の書簡

有地品之允は明治期の海軍軍人。有地品之允の書簡は日本医史学雑誌第56巻第4号に4通掲載に付省略。

[12] 有馬頼萬家令（鵜飼広定）・家扶の書簡

有馬頼萬は筑後久留米藩主。有馬頼萬家令（鵜飼広定）・家扶の書簡は日本医史学雑誌第55巻第3号に4通掲載に付省略。

[13] 有村国彦の書簡

有村国彦は明治期の実業家。天保13年生まれ。子爵海江田信義の弟。第五銀行頭取、島津家の財政顧問を勤める。明治40年没。享年66。（1842-1907）

1 明治11年12月21日 (70)

口代
一、金 六円
一、鴨 一籠
一、琉球紺縞 一反
右之通為御謝礼進呈仕候間、御納得可被下候、以上
十一年十二月廿一日 有村国彦
池田謙斎様

[14] 安藤浩の書簡

安藤浩は明治期の実業家。嘉永4年甲斐国に生まれる。川崎銀行本店支配人、芝「紅葉館」社長を勤める。昭和7年没。享年82。（1851-1932）

1 明治39年1月 (46)

拜啓、嚴寒之時節益御清福奉敬賀候、陳ハ貴家様ニハ從來御取引銀行ハ可被在候へ共、本行ハ戦捷後之發展ト供ニ一層勉強致し御預ケ金之如キハ可成高歩ニ、御用立金之如キハ低利ニ精々御便宜之御取扱可仕候間此際御取引御開始被成下度、最近之決算書相添へ得貴意候、草々敬白

卅九年一月 川崎銀行営業部長 安藤浩
池田謙斎様

[15] 安部信發の書簡

安部信發は三河半原に知行地を持つ武家華族。安部信發の書簡は日本医史学雑誌第55巻第3号に1通掲載に付省略。

[16] 伊澤修二の書簡

伊澤修二は明治・大正期の教育者。嘉永4年信濃国高遠藩士家に生まれる。明治5年文部省に出仕。12年東京師範学校校長となり西洋音楽の受容に尽力する。大正6年没。享年67。（1851-1917）

1 明治12年11月28日 (501)

來ル三十日当校ニ於テ幻灯映画ヲ以テ欧州名処・生理・地質・天文等之講説相催ニ付、若シ貴意ニ適ヒ候ハ、同日午後五時三十分來校ヲ奉希望候、頓首

明治十二年十一月廿八日

東京師範学校長 伊澤修二

東京大学医学部総理 池田謙齋殿

再啓、若シ雨天ニ候ハ、順延仕候也

[17] 石黒忠^{ただのり}憲の書簡

石黒忠憲は明治期の陸軍軍医総監。石黒忠憲の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に46通及び日本医史学雑誌第56巻第4号に3通掲載に付省略。

[18] 石原助安の書簡

石原助安は東大予備門書記。石原助安の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に16通掲載に付省略。

[19] 伊勢屋三郎右衛門の書簡

伊勢屋三郎右衛門は江戸期札差業（幕府蔵米取扱業・及び金融業）を営む。

1 明治3年1月 (572)

正二月分

米式石壹斗六升七合

内式升壹合六タ七才□

式石壹斗四升五合三タ三才

式郷半米但 [四斗式升三合入 / 三百拾四匁 □□□]

代金式拾式兩壹□五□分式厘

午正月

伊勢屋三郎右衛門 印

池田謙齋様

御用人中様

(上部一カ所に伊勢屋の割り印あり)

[20] 市川寛繁の書簡

市川寛繁は東大庶務課事務官。市川寛繁の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に7通掲載に付省略。

[21] 一川^{いちかわ}研三の書簡

一川研三は明治期の官僚。天保10年美濃国に生まれる。大蔵省大書記官・国立印刷局長を歴任。

明治21年没。享年50。(1839-1888)

1 明治 年9月17日 (805)

本日参館御診察相願度心得之処、折節王子分局へ見廻りとして只今より出張いたし候間、書中ヲ以容体申上候、過日来別段相変ル事無御座候、此程中少し風邪之処随て先頃之如ク痰気ヲ起し適々一咳ヲ発し、且胸部之発動も未タ相去リ不申候、御葉も相尽候間葉袋為持差出し候間、可然御勤考希上候、委細ハ明日ニも拜趨可申陳候也、草々頓首
九月十七日 一川研三

[22] 一條家家扶の書簡

一條家は公家華族。一條家家扶の書簡は日本医史学雑誌第54巻第3号に1通掲載に付省略。

[23] 五辻^{いつつじ}安仲の書簡

五辻安仲は公家華族。五辻安仲の書簡は日本医史学雑誌第54巻第3号に6通掲載に付省略。

[24] 伊藤博文の書簡

伊藤博文は明治期の政治家。伊藤博文の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に4通、日本医史学雑誌第56巻第4号に3通掲載に付省略。

[25] 伊東^{いづみ}祐^{より}家扶・家従の書簡

伊東祐婦は日向飢肥藩主。伊東祐婦家扶・家従の書簡は日本医史学雑誌第55巻第3号に2通掲載に付省略。

[26] 稲葉正邦の書簡

稲葉正邦は山城淀藩主。稲葉正邦の書簡は日本医史学雑誌第55巻第3号に1通掲載に付省略。

[27] 犬飼^{いぬかい}殿麿の書簡

犬飼殿麿は明治期の司法官。犬飼殿麿の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に4通掲載に付省略。

[28] 井上^{いのかみ}馨・勝之助・執事の書簡

井上馨は明治期の政治家。井上馨の書簡は『東

大医学部初代総理池田謙齋』下巻に10通，日本医史学雑誌第56巻第4号に井上馨1通，井上勝之助5通，執事2通掲載に付省略。

[29] 井上毅^{こわし}の書簡

井上毅は明治期の法制家。井上毅の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に19通掲載に付省略。

[30] 井上哲次郎の書簡

井上哲次郎は明治期の哲学者。井上哲次郎の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に1通掲載に付省略。

[31] 今井友五郎の書簡

今井友五郎は明治期の実業家。三井銀行の経営に当たる。

1 明治11年12月23日 (499)

寸毫奉拜啓候、^(ママ) 遂日寒威相増候処、益御清適被成御奉職欣喜奉大賀候、然は甚以輕微之至御坐候得共、鴨一番歳暮為御嘉儀奉呈上度御叱留被成下候ハ、大慶不斜奉存候、最早年内余日も無御坐、御繁多ニ可被為在と奉恐察候、先は前条申上度如此御坐候、恐々頓首

十一年十二月廿三日 今井友五郎
池田謙齋様

[32] 岩倉具視・具綱・具定・具^{ともつね}経・家令・家扶の書簡

岩倉家は公家華族。岩倉具視・具定の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に具視2通，具定15通，日本医史学雑誌第54巻第3号に具視1通，具綱3通，具経1通，家令1通，家扶6通掲載に付省略。

[33] 岩崎小次郎の書簡

岩崎小次郎は明治期の官僚。肥前大村藩士家に生まれる。大蔵省銀行局長・滋賀・大分・福岡県知事歴任。28年没

1 明治26年12月8日 (3586)

医師 弓場厚載
全 広山方朔

右ノ者赤痢病患者ヲ診察シナカラ制規ノ時間内ニ其届出ヲ為サ、リシヲ以テ伝染病予防規則違反トシテ各罰金ニ処セラレタル旨裁判所ヨリ通知ニ付、当時ノ実況取調候処左ニ記載ノ通ニシテ、為メニ病毒ヲ散蔓セシメタル実跡等モ不相見、仍テ兩名共医業禁停止ノ御処分ニハ及間敷相認メ候、即チ別紙判決書謄本相添此段上申候也

明治廿六年十二月八日

福岡県知事 岩崎小二郎

内務大臣 伯爵 井上馨殿

弓場厚載

一、本人平素ノ性行ハ篤実。

一、本人ノ犯状ハ懈怠。

一、本人居村内ニ医師一名、隣村廿丁以内ノ地ニ二名アリ。

一、本人カ届出ヲ怠リタル患者吉田タキカ発病。

(以下欠)

[34] 岩崎弥之助の書簡

岩崎弥之助は明治期の実業家。岩崎弥之助の書簡は日本医史学雑誌第56巻第4号に1通掲載に付省略。

[35] 内村良蔵の書簡

内村良蔵は明治期の官僚。山形県士族の生まれ。明治4年岩倉遣欧使節団に文部大丞田中不二麿の随員として参加。明治14年東京外国語学校校長・文部権大書記官歴任。43年没。

1 明治(17)年1月12日 (828)

(封筒表) (欠) 大学医学部 池田謙齋殿 内展

(封筒裏) 内村良蔵 謹呈

新禧御同慶此事奉存候、扱此度独乙より帰朝相成候北尾某氏⁽¹⁾事大学へ採用相成哉之由伝承、右者如何之御都合ニ候哉、若し御差支なき儀候半当語学校ニも一日二時間程独乙語学之授業依頼致度、尤も給料百円以内可相払心得ニ御坐候、右相

伺候間御内意御一報被成下候半ハ幸歟、唯今加藤
綜理を訪候得共不在ニ有之、且ツ此儀ハ尊台御專
管之由承候間、前段相伺候、早々不備

一月十二日 良蔵 再拜
池田賢台 忝几下

(1) 北尾某氏 明治16年ドイツより帰国した
北尾次郎と思われる。北尾次郎は物理・気象
学者として帝国大学理科大学教授を勤める。
享年55。(1853-1907)

2 明治(17)年1月17日 (717)
謹呈、同前北尾氏君事ニ涉り御内意相伺候、束速
ニ御答被成下万謝之至、其後別ニ都合を得、先ツ
同君を要せず候様可相運候間、此段為念入貴聴置
候也

同十七日 内村良蔵 再拜
池田老台 閣下

3 明治 年9月7日 (3268)
小生も心外御無音罷在候、来命謹承、独乙生新募
集ハ無之尤も多少闕員ハ可有之候、是者ハ来月初
旬までニ広告可致哉、鄙考罷在候、右は御答まで、
早々不荘

九月七日 良蔵 再拜
池田先生

[36] 榎本武揚の書簡

榎本武揚は幕末・明治期の軍人・政治家。榎本
武揚の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下
巻に5通掲載に付省略。

[37] 大石秀実の書簡

大石秀実は明治14・15年宮内省御用掛を勤め
る。

1 明治 年9月27日 (699)

(封筒表) 濱町一丁目 池田謙齋様
一ツ橋通町チノ六番地 大石秀実

(封筒裏) 封 九月二十七日午前

(端裏書) 池田様 大石生拜

過日は拜趨御多忙中御妨□恐悚之至ニ候、其節奉
願候星野氏之一条、同人ヨリ別紙之通申来り候間
御一覽可然奉願上候、井上生履歴書差上候、当人
之志願ハ司薬師之末列カ或ハ製煉場へ御使ひ被下
候ハ、多幸之至ニ御坐候

九月念七 秀実
池田先醒侍史

副白、流冒ニ涉り候得共彼薬方之儀偏ニ御依頼
仕候間、小生窮途御憐察被下御勤考奉願候

三白、売薬中女ノ血症ニハ良方モ無之哉と存
候、何カ御考被下間敷歟、奉伺置候

2 明治 年12月30日 (698)

其後は紛忙ニて不得趨候、道体万福奉恭喜候、陳
ハ僕郷里親戚ニ無拋事故差起り候、今一便着仕候
上ニて立帰ニ罷越不申候てハ不都合ト存候、住友
滞留一月余ハ相掛り可申ニ付、医学部へ辞表差出
可申歟、或ハ僕旧知之者暫ク代勤為致置候様之御
執計モ相成哉、[願ハクハ後条ニ相成候ハ、忝候]
何分不案内ニ付趨叩之上仰御指揮度、年余多忙呈
郵書候、至急御報被下度翹企奉待候、頓首

十二月三十日 大石秀実
池田先醒

弥癸程仕候ハ、一月四日五日頃御坐候、一兩日
中ニ御指揮可被下候

3 明治 年7月10日 (700)

(封筒表) 駿河台南甲賀町 池田謙齋様

(封筒裏) 緘 本郷六丁目法真寺ニテ 大石秀実

七月十日午前

拜啓、梅雨之候ニ御坐候処体愈御佳適奉恭賀
候、尔ハ過日女訓之儀ニ付御煩勞之件ヲ流請不堪
恐悚候、於諸府県小学教科取調ハ本月中ニ在之候
由ニ付、既ニ御囑托ニ被成下候歟此段上堂奉伺答
ニ候得共乍略儀一書晋呈、至急ニ御報奉願候也、
謹白

七月十日 秀実
池田先生 侍史

4 明治 年9月11日 (712)

過日上堂之節貴嘱ヲ受候漢英学生彼此問合候処、
適當之人物無御坐御答及遅延候、矢野良臣ト申入
先年外国語学校漢学教員奉職シ居、小生知交ニテ
当今ハ司法省ニ奉職仕居候、漢英学共ニ頗通涉シ
資質温厚ニ候、近日参上為致可申歟、奉伺候間御
在館之日時等御示諭被下度候、頓首拜白

九月十一日 大石秀実
池田先生 執事

5 明治 年4月24日 (820)

先夜上堂長坐拝晤奉謝候、其節相願候岡本氏宅地
抵当貸金之儀、同人へ御厚情之趣ヲ相話シ候処、
本月末ニても宜候間御依頼申上度、尤同人直ニ拜
昇之上奉願答ニ候得共、至急用有之上総え罷越候
ニ付、右代理ハ上楨町四番地参河屋与平へ相嘱シ
有之押印并保證人等も差支無之様之手都合致有之
趣ニ候間、御繁務中甚恐入候得共右御尽力被成遣
候様小生ヨリモ伏て奉願候、右調談ニ相成候様之
様子ニ候ハ、小生え御一報被下候ハ、右与平呼寄
為取計候様岡本氏ト委曲談合置候事ニ御坐候、右
奉願如是、頓首

四月念四日 秀実 拜
池田先醒 侍者中

[38] 大木喬任^{たかとう}の書簡

大木喬任は明治期の官僚・政治家。大木喬任の
書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に5
通掲載に付省略。

[39] 大久保利和^{としなか}と執事の書簡

大久保利和は幕末・明治期の政治家大久保利通^{としみち}
の長男。大久保利和と執事の書簡は日本医史学雑誌
第56巻第4号に1通掲載に付省略。

[40] 大隈重信・執事の書簡

大隈重信は明治・大正期の政治家。大隈重信の
書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に1
通、日本医史学雑誌第56巻第4号に大隈重信の
書簡1通、執事の書簡3通掲載に付省略。

[41] 大倉喜八郎の書簡

大倉喜八郎は明治・大正期の実業家。大倉喜八
郎の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻
に6通、日本医史学雑誌第56巻第4号に4通掲載
に付省略。

[42] 大河内正質^{まさただ}の書簡

大河内正質は上総大多喜藩主。大河内正質の書
簡は日本医史学雑誌第55巻第3号に2通掲載に
付省略。

[43] 大谷光瑩^{こうえい}の書簡

大谷光瑩は浄土真宗東本願寺門主。大谷光瑩の
書簡は日本医史学雑誌第54巻第4号に1通掲載
に付省略。

[44] 大谷光瑞の書簡

大谷光瑞は浄土真宗西本願寺門主。大谷光瑞の
書簡は日本医史学雑誌第54巻第4号に1通掲載
に付省略。

[45] 大鳥圭介の書簡

大鳥圭介は幕末・明治期の軍人・政治家。大鳥
圭介の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上
巻に6通掲載に付省略。

[46] 大森鍾一^{しょういち}の書簡

大森鍾一は明治期の官僚。大森鍾一の書簡は日
本医史学雑誌第56巻第4号に2通掲載に付省略。

[47] 大山巖の書簡

大山巖は明治期の軍人。大山巖の書簡は『東大
医学部初代総理池田謙齋』下巻に3通掲載に付省
略。

[48] 岡本監輔の書簡

岡本監輔は北方探検家・官僚。天保10年阿波
藩医薬家に生まれる。幕末・維新期の北方政策に
関与し島義勇・松浦武四郎と開拓判官になる。東
大予備門御用掛・一高講師・台湾国語学校教授歴
任、明治37年没。享年66。(1839-1904)

1 明治 年7月26日 (710)

猛暑之候御座候へ共益御清穆被為在奉恭悦候、尔後久敷不候起居恐縮之至御海容奉冀候、拟先生へ奉伺度一件小生参館可仕之処、其事至急ニテ且御不在之程も難計、旁以書中失敬仕候、其ハ別紙人物一友より被尋候義ニ御座候、別紙之通り如何ナルものニ御座候哉、友人為伺候間御閑暇有之御面晤被成下、夫々御指麾奉願候、不取敢大乱筆失敬仕候、何れ其内拜候万奉申上候也

七月廿六日 岡本監輔
池田先生 侍者

2 明治 年9月18日 (711)

拜啓、旦夕秋涼日加益御清穆被為在奉大賀候、先日ハ罷上り大ニ御妨仕候、其節御願申上候一書生為伺候間御閑暇にも被為在候ハ、御一覽被成下度偏ニ奉冀候、先般拜借之金御礼申上候筈之処、茫然相帰り何共不相濟恐入候、右御願旁奉伺早々如斯ニ候也

九月十八日 監輔 拜具
池田先生 左右侍者

3 明治 年10月15日 (817)

良医之国先生ノ任ハ謂ハザルヲ得ズ、先生ノ得意ハ間然スベキナシ、生ノ失意ヲナニセン、此事是非公論ニ御下附被下度候也

拜啓、本日ハ参上大ニ御妨申上候、其節被仰下候件別紙之通り書取り申候、願クバ御友人中へ御示し被下置度、是実ハ今日之急務と存候間旧友諸人ニ相談候処空敷笑談ニ附セラレ候、惜騎之条ハ共ニ論ズルニ足ラズ、高意偏ニ御奮発被下度奉願候、文面ニ於て不都合候ハ、御直し被下度、直ニ清写し早々指上候様可仕候、此事廟堂ニ於て可否如何御披経被下候様仕度偏ニ懇願候也

十月十五日夜 岡本監輔 拜具
池田大人先生 侍者

此事ハ雲井龍雄羽倉鋼三郎杯ノ斧物ニハ異ナル処と奉存候、間接トハ申ナガラ其様子ハ大忠ナルベシ、偏ニ御尽力奉冀候、乱筆不成章御海容被成下度候

[49] 荻昌吉の書簡

荻昌吉は明治14年明治天皇侍従を勤める。

1 明治 年4月24日 (705)

別紙之通相催申候ニ付是非御出場之程希望仕候也
四月廿四日 荻昌吉
池田謙斎殿
追て其他御誘導之義も奉願上候

[50] 沖荘蔵の書簡

沖荘蔵は那覇地方裁判所予審判事。明治37年日露戦争時ハルビンにて銃殺された沖楨介の父親。

1 明治 年3月5日 (725)

謹啓、未得拜姿候へ共益御清福奉大賀候、却説唐突之義候得共、長男楨介⁽¹⁾曾テ渡清北京ニ文明学校創設、支那人教育ニ従事罷在候央、其筋より秘命ヲ受ケ抛筆硯北行ノ途ニ上ル旨^(ママ)運信有之候処、不運ニモ横川省ニト共ニ哈爾濱ニ於テ敵手ニ斃サレタル趣ニ有之、一死殉国臣民ノ本分ニハ御坐候得共親子ノ私情忍難申情モ有之、未練なからも本人ハ多少美術思想ヲ有シ居ニ付江湖名勝ノ詩文歌俳絵画ノ類奉願追福ノ資ニ供度、軍国多事ノ際殊ニ寸効ナキ豚児ノ為メ奉願候も恐多キ次第ニ御坐候得共、高貴ノ御同情ヲ蒙ルニ於テハ本人ノ名誉ハ勿論、家門ノ光栄ニ御坐候間、衷情御憐察御序男爵公ヲ奉初御一族様へ御染筆御願被下度何卒可然御取成之程伏テ奉願候、頓首百拜

追て用紙差出可申上筈ノ処、痛解欠用意乍失礼御返信料ノ封入仕候、美濃ノ紙幅ヲ超ヘサ(欠)寸法ノモノ、又ハ色紙短冊ニ御揮写御願可被下候

三月五日 沖荘蔵
男爵 池田家

御家扶 御中

尚ホ貴下ノ御手沢モ頂戴奉願候、而シテ可成多数蒐集ノ精神ナレトモ微力不任意心痛罷在候ニ付、乍恐縮御知友ノ向ヘ貴下より御勸奨被下候ハ、幸福無涯、小生ハ目下那覇地方裁判所予審判事奉職從六位勲五等ノ者ニ御坐候、為念加筆仕候

(1) 沖禎介 日露戦争時特殊任務従事者。明治7年長崎県平戸に生まれる。37年4月21日日露戦争勃発と共に横川省三と東清鉄道爆破直前に逮捕されハルピンにて銃殺刑に処せられる。享年31。(1874-1904)

2 明治 年4月15日 (726)

拜肅、時下益御清福被為涉候段奉遥賀候、却説豚兒追悼ノ為メ御染筆奉願候処、御甘諾被下り早速望玉ノ詠ヲ賜り実ニ望外ノ仕合、唯々感涙ニ咽フ耳之他拜謝之道無之泉下ノ靈之嘸ヤ歎喜可仕慰藉隨一ニ有之、永久家宝トシテ珍襲可仕候、右ハ謹奉呈謝表候、頓首百拜

追て甚タ恐入候得共御知友ノ向へハ御伝手ノ折御伝へ奉願候

四月十五日 沖莊蔵

男爵 池田家

御家扶 御中

[51] 沖守固・貞男・貞次の書簡

沖守固は明治期の官僚。沖守固の書簡は日本医史学雑誌第56巻第4号に1通、貞男の書簡1通、貞次の書簡1通掲載に付省略。

[52] 大給互の書簡

大給互は竜岡（信濃田野口）藩主。大給互の書簡は日本医史学雑誌第55巻第3号に3通掲載に付省略。

[53] 奥田小三郎の書簡

奥田小三郎は明治20年頃鐘紡（株）の重役か。

1 明治 年4月17日 (707)

代舌

小子変り無御坐候得共、未喰物進兼候、前御法ニて宜候得ハ水菓御投与奉願候

散菓之方ハ未残り御坐候間此次ニ御願可申上候

四月十七日 奥田小三郎

池田様 薬局御中

[54] 奥平昌邁の書簡

奥平昌邁は豊前中津藩主。奥平昌邁の書簡は日本医史学雑誌第55巻第3号に1通掲載に付省略。

[55] 海江田虎次郎の書簡

海江田虎次郎は子爵海江田信義の3男。式部官・陸軍騎兵少尉。妻千代子は池田謙齋の長男秀男の妻房子の妹。依って池田秀男は義兄に当たる。

1 大正4年12月31日 (3234)

玉章拜見仕候、陳ハ正金約手の件ニ付色々と御高配ニあつかり奉万謝候、尚将来とも宜しく御願ひ申上候、本日私不在中沖旧邸⁽¹⁾へ莊徳次郎氏来られ、土地ノ間数など測量して御帰りありたる由ニ候、大正四年も御繁忙の内ニ終らんといたし居候、何卒よき新春御とり被遊度念じ上候、不一

三十一日 肅次郎

兄上⁽²⁾様

(1) 沖旧邸 男爵沖守固の邸宅。池田秀男の妻房子と海江田虎次郎の妻千代子の実家。

(2) 兄上 池田謙齋の長男秀男の事で義兄に当たる。

[56] 香川敬三の書簡

香川敬三は明治期の皇后宮大夫。香川敬三の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に21通、日本医史学雑誌第56巻第4号に3通掲載に付省略。

[57] 華頂宮家扶の書簡

華頂宮は皇族。華頂宮家扶の書簡は日本医史学雑誌第54巻第1号に2通掲載に付省略。

[58] 勝間田稔の書簡

勝間田稔は明治期の官僚。天保12年山口藩士家に生まれる。新潟・宮城・愛媛県知事・図書頭歴任。明治39年没。享年66。(1841-1906)

1 明治 年7月6日 (1457 B)

(封筒表) 駿河台 池田謙齋様 親展急
 (封筒裏) 糊 三番地 六拾三番地 勝間田稔
 過日は早速御答被下拜承仕候、此節ハ茗公御重病ニ被為渉候由、別て御配慮想像仕候、付てハ必スシモ日時御定被下候ニ不及ニ付、両三日中御来診被下候ハ、意外ノ幸福ニ可有之、実ハ在松生も巳ニ転方ノ期ト見認メ頻リニ御来診祈望仕居候、御願旁草々頓首

七月六日 稔
 池田先生 虎皮下

2 明治 年9月1日 (1458)

一、昨日朝倉博士ノ診察ヲ受ケ、其後尿道ニ微痛ヲ生シ、尔来排尿比較的頻数トナレリ
 一、尿道ノ痛ハ今朝ニ至リ大ニ減スルモ、放尿ノ際ハ尚ホ刺撃アリ
 一、今朝午前八時ノ放尿又少シク紅色ヲ呈セリ
 九月一日 勝間田

[59] 桂太郎の書簡

桂太郎は明治・大正期の陸軍軍人・政治家。桂太郎の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』下巻に7通掲載に付省略。

[60] 加藤弘之の書簡

明治期の指導的思想家。加藤弘之の書簡は『東大医学部初代総理池田謙齋』上巻に63通、日本医史学雑誌第56巻第4号に3通掲載に付省略。

[61] 兼松直稠の書簡

兼松直稠は明治期の官僚。明治19年大蔵省會計局兼外務参事官。

1 明治10年10月5日 (1445)

(封筒表) 浜町老丁目拾番地 池田謙齋殿
 侍史 兼松直稠
 (封筒裏) (消印 東京・一〇・一〇・五・に)

過日ハ種々御馳走深謝ニ候、さて御投書之趣拜承、今日三穂氏拙宅え罷越候筈ニ付面談を遂ケ、委報可申上候、就ては何日ニ參楼可然哉、今日ハ御泊り番之様心得居候間拜趨不致、乍失敬以書中拜答、頓首

十月五日 直稠生
 謙齋大人 坐下

2 明治14年11月11日 (1446)

(封筒表) 駿河台南甲賀町九番地 池田謙齋様
 拝復 兼松直稠
 (封筒裏) (消印 東京・一四・一一・一一・ほ)
 今朝ハ御用多之中早速御答被成下難有拜見仕候、未タ伊東先生ニハ御出逢無之由、御逢之節ハ何分ニも兼て願置候記名之事御話置可被下候、金子一件ニ付御懇切之段厚謝之至リニ御坐候、何れ事決定次第にて参上、尚可申述候、右御挨拶まで、早々敬具
 十一月十一日 直稠
 池田先生 坐下

(兼松直稠の書簡は次号に続く)

[主要参考文献]

- 朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社 1994年11月30日発行
 池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙齋』上・下巻思文閣出版 2007年2月25日発行
 日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館 1981年9月10日発行
 大植四郎編『明治過去帳』東京美術 1971年11月20日発行
 稲村徹元・井門寛・丸山信編『大正過去帳』東京美術 1973年5月15日発行
 日本医史学雑誌第54巻第1号 2008年3月発行
 日本医史学雑誌第54巻第3号 2008年9月発行
 日本医史学雑誌第54巻第4号 2008年12月発行
 日本医史学雑誌第55巻第3号 2009年9月発行
 日本医史学雑誌第56巻第1号 2010年3月発行
 日本医史学雑誌第56巻第4号 2010年12月発行
 日本医史学雑誌第58巻第1号 2012年3月発行